

先人の知恵から

12

かうんせりんぐるうむ かかし

河岸 由里子

今回で12回目ということは3年も続けているということになる。やっとあ行が終わるが、か行やさ行も諺は多い。気になった諺やよく使う諺、或いは、最近は使われていないけれど、使ったら良いのにと勝手に思っているものを拾って書いている。面白いと思う人は少ないとは思いますが、何かの足しにでもなれば幸いである。

さて今回は「お」のつくものから、次の7つを挙げてみた。

- ・老いたるを父とせよ
- ・老いては子に従え
- ・負えば抱かれよう
- ・少し少なし子三人
- ・傍目八目おかめはちちく
- ・伯父が甥の草を刈る
- ・鬼の閉てたる石の戸も情けに開くあ

<老いたるを父とせよ>

年を取った人を父のように尊敬せよと言う教え。出典はらいき礼記。

年長者を敬いなさいということは、小学校の頃の道徳でよく言われていた覚えがある。その当時の自分にとって、年長者と言うと大人全部だった。大人はちょっと怖い存在でもあり、大人に対し、言葉遣いも決してため口をきくことなど無かった。特に先生に対しては、口の聞き方、態度など厳しく指導されていた。

しかし今の時代、小学校や中学校に行ってみると、子どもたちは正しい敬語を使っていないどころか、ため口で話している。何年も年長であるはずの先生に対して、た

め口になってしまうのはいかなものか。

そのような状態で、歳を取った人を尊敬しなさいと言う教えは、時代にそぐわないと言われるのかもしれない。自分の親に対してももちろん敬語で話すなどと言うことはない時代であるから、知らない老人に対して尊敬の念を抱くことなど難しいだろうとは思ふ。

また、老人がみな素晴らしいわけでもないだろう。人々から賞賛されるような、たいしたことをしていなくても、丁寧に歳を重ねて行った方には、顔の表情、しわの一つ一つに貫禄が感じられる。生きるということそのものに、さまざまな苦難がある以上、長い年月を生き抜いてきたと言うことの意味は大きい。

歳を重ねた人を敬い、助言を貰ったりすることを有難く思うことは、若者にとってはとても大事なことである。敬老の日は何のためにあるのか、老人との交流で学べることは何か。いまどきは父親に対して尊敬の念を持たない子どもも多い中、余計に難しいことかもしれないが、敢えて、年長者を敬えと言わなければいけない時代なのだと思う。

一方で、年長者も、ただ歳が上だからと、えらそうにするのではなく、自らその重みをかもし出せるような人間を目指さねばならないだろう。不惑の歳を過ぎれば、人間自分の顔に責任を持つべきである。若者たちにもものを言う前に、自分自身を戒める言葉としても、この諺を挙げさせて貰った。

＜老いては子に従え＞

年を取ったら出しゃばらずに何事も子に任せて、その意見や方針に従うのが良いということ。本来は「三従（幼時は父に、結婚したら夫に、夫の死後は子に従う事）の教え」の一つで、女性に対する仏教・儒教の教えから来た封建時代の言葉だが、現在は老人のあり方を説いたものとして広く用いられる。江戸いろはがるたの一つ。

前述の諺と、逆の側の話であるが、歳をとったら、大人しく、若いものの言い分を聞き、意向を尊重して、若いものの言うとおりにしなさいよということであるが、年寄りが元気だと兎角揉め事も多くなりがちである。我々年長者は、勿論若い者よりも、経験や知識があり、言いたいことが一杯あるだろうが、そこを我慢して、若い者に任せるのは中々大変な事だ。つつい口を出してしまう。70、80になっても、いまだに一家の主として全ての采配をしているおじいさんやおばあさんを見かけると、お元気なのは悪いことではないがどうもなあと思ってしまう。程ほどにして、道を譲っていくことが後進を育てることにもなるだろうにと。

また、最近、歳を取ったからと偉そうにしている方が、回り近所に迷惑を掛けているというニュースが続いていた。

言葉遣いも、態度も、本当に酷くて目や耳を覆いたくなるような人が出ていた。この人たちはいったいどのような人生を送ってきたのだろうか？誰も信じられず、人を見たら疑ったり攻撃したりすることしか出来ないとしたら、余程酷い目にあってきた

のだろう。そんなことにならないように、歳を重ねて行けば、今は違っていただろう。自分の顔に責任を持ち、自分の心を磨いて、丸く、穏やかになりたいものである。そして、「まだまだだなあ」と思いながらも若者の頑張りを認め、成長を喜べる人でありたいと思う。

老いて子に従っていられるということは、子育ても上手く出来たと言える、最大の喜びの瞬間なのではと思う。

<負えば抱かれよう>

一つの事をしてやると、凶に乗って更にもその上の事を要求すること。子どもにせがまれて仕方なく背負ってやると、甘えて次は抱いてくれということから。「負えば抱かれよう」ともいう。

幼い子どもが次々と甘えてくる姿は、ほほえましく、仕方がないと思えることが多いが、いい年をした大人が、次々と甘えてくる姿は、醜いとしか言いようが無い。

世の中には甘え上手と言う輩がいる。なんだかんだ言いながら、自分の思い通りに物事を進ませたり、自分は何もせずに人を動かしている人など、「腹が立つほど上手」である。私自身は余人に物事を頼んだり、お願いしたりすることが苦手な方だったので、たまには真似をして、誰かに甘えてみたいと思うのだが、やりなれていないことはそう簡単には出来ない。

相談に来る方に対して、あれこれしてあげるのは得策ではない。助言も程ほどにし

ないと、依存を生む。支援者がすべきことは、前に立って引っ張ることではなく、一歩後ろから、見守っていくことであろう。引っ張っていけば、人は自分の足で歩かなくなり、いずれ、背負ってくれと言うだろう。

支援者と言うものの立ち位置、あり方を表す諺として、この言葉をもって、自らを戒めて行きたいものだ。

<多し少なし子三人>

子どもの数は三人ぐらいがちょうどよいということ。「多し少なし」はほぼ適当という意味。

少子高齢化の時代にあって、子どもをたくさん生むことが良いことのように言われている。しかし、生めばよいと言うものでもないだろう。筆者自身は5人兄弟であるが、筆者が三人目を妊娠したとき、母親から「三人は大変だけどちょうど良い」と言われたのを思い出す。二人は両手でひとりずつ抱けるので、良いが、三人になると手が足りなくなる。それが又大変だけど、その子育てが出来ると一人前なのだと言われた。四人以上は上の子が下の子を見るようになるから、親だけが大変になるわけではないとも言われた。

そんなものなのかなあと思いながら子育てをして来た。今この諺に出会ってみて、そう言えばと思ったので挙げることにした。

友人関係もそうだが、三人の関係と言うのは難しい。ついつい2対1になりやすい

からで、子どもたちにも三人の関係ができる
と言うことが、人間関係の成長と大きく
関係していると伝えることが多い。

一人っ子では、大人の目が届きすぎ、子
どもらしく育つことや、自立的に育つこと
などに支障が見られることも多い。二人だ
と良いように思うのだが、男女一人ずつだ
とどちらか一人っ子ようになってしまう
こともある。また、長子と末子と言う関係
のみで、真ん中の子と言う存在が無い。

真ん中の子という存在は、立場上中々難
しいものがある。我が家でも三人姉妹の真
ん中の子は、自分の存在感についてその薄
さにイライラ感を募らせている時期があっ
た。その当時の彼女の言葉は「長女には長
女と言うステータスがあるし、三女には末
っ子と言うステータスがある。次女にはな
にもない。」と言うものだった。親としては、
そんなことは考えず、どの子も同じように
育てているつもりだが、子どもなりに感じ
るところがあったのだろう。そうした関係
性を意識しては居なかったので、その言葉
がとても新鮮だったのを覚えている。谷間
と言う言葉は以前からあったが、三人の子
育てを上手くやっていくことの難しさを、
保護者たちに伝えるのに、娘の言葉を使う
ことも多かったが、これからは、「多し少な
し子三人」を使っていこうと思う。

<傍目八目>

物事は利害関係のない第三者の方が当事
者よりも冷静に観察ができ、正確な判断が
できるということ。「傍目」とは脇でみてい

ること。「傍目八目」は囲碁の言葉で、「他
人の打っている囲碁を傍^{はた}から見ている者は、
対局者よりも八目も先の手が見えるという
意から。囲碁も将棋も打っている者同士は
勝つことに必死だが、傍観者は局面の全体
を見渡す余裕があることから、当事者より
も局外にいて冷静に観察している人のほう
が的確に判断できるということ。

その他、「八目」には、多くの数を表す「八」
と「目」からなる「やつめ」が本来の形で、
多くの目の意味とする説や、八目分得する
手がわかるといった意味など諸説ある。

これは我々支援者にとっても、また、保
護者にとっても役に立つ言葉ではないかと
思う。親子の関係性の中で、勉強や稽古事
を教えたりするのは、中々上手くいかない。
つつい感情的になって冷静な対処が出来
なくなる。又支援者としても、一生懸命支
援に力を入れれば入れるほど、冷静さを失
っている人にも良く出会う。

第三者の立場になって考えてみれば、新
たなアイデアに気づくこともあるし、第三
者から指摘されることもある。それは第三
者だからこそ分かったり見えたりするの
である。

より良いサービスの提供のために、「傍目」
の立場でもう一度眺めてみる、或いは俯瞰
的に見直してみると言うことを心がけると
良いだろう。

英語では・・・

Dry light is the best. (陰影の無い光線が
最も良い)

Standers-by see more than gamestars.
(ゲームに参加している人よりもそれを見

ている人の方が多くの事が見える)

<伯父が甥の草を刈る>

不自然なことや、物事の順序が逆であることのため。目上の伯父が甥のために働かされることから。目上の者が目下の者のために奔走させられることのためという意味もある。

世の中、不自然に思うことは多々ある。特に、目上の人から下の者のために、骨を折り、苦労しているさまに出会うことも増えた。両親は子どものために、あれもこれもがんばって、お金もどんどん出している。特に引きこもりの青年にいたっては、食事の世話、洗濯、掃除、あれもこれもしてあげて、お小遣いもあげている。おかしな話である。

小さい子どもならともかく、自分のことが自分で出来る年齢になれば、やらせていくのが本当だろう。暴れるからとか可愛そうだからと言うのは、親として子どもと向き合おうとしていない話である。

大きくなってから暴れられれば、当然太刀打ちできないだろう。もっと早い段階で追い出せばよいのである。小さいうちから、自分でできることは自分でやらせていくだけでも、変わっていくものだろう。

大人と子どもの関係が逆転しないように、気を付けて行かねばならない時代ではと感じる。

また、大人が子どものためにあれもこれも動いているケースにも出会う。忘れ物を

したと言っては届け、友達の家に行くと言っては送り迎えをさせる。そんなに子どもの言いなりに動く必要はないのではと思うことも多い。もう少し、よく考えて行動をしていかねばならないのではと思う。

<鬼の閉てたる石の戸も情けに開く>

どんなに頑なな人の心も、他人の誠意によってうちとけて来るものだということ。人の誠意が通じない物は無いということ。

対人援助の仕事をしていると、中々こちらの思いが通じないケースに出会う事も多い。一生懸命やっているのに、どうしてわかって貰えないのだろうと思い始めると、人間はついつい相手のせいにしたくなる。自分がこんなに頑張っているのに伝わらないのはきっと相手が偏屈だからだなどと勝手に理解し、納得して気持ちを収めようとしてしまう。しかしよく考えてみよう。

自分が一生懸命やっていることが、本当に相手のためになる事なのだろうか？相手にとって自分は本当に役に立つことをしているのだろうか？有難迷惑や余計なお世話ではないだろうか？正義感や常識を押し付けていないだろうか？

そんなことを先ずよく見直したうえで、尚且つ、地道に、相手に寄り添って、つかず離れずの距離で頑張っていると、必ず気持ちは通じるものだと思う。頑なに人を拒む人ほど、人を求めているように思う。だからと言って押しつけがましく、ずかずかと相手の気持ちに踏み入れば、当然拒否さ

れる。人に傷つけられた人は人を中々信用しない。そんな過去がある事を念頭に入れつつ、ゆっくりと、亀の歩みでほんの少しずつ近づいて行ければ、どんな人でもいつか心を開いてくれるものだと、今までの経験から感じている。

打算ではなく、純粋な気持ちで、へこたれずに頑張ってみることが、小さな小さな風穴をあけてくれると思う。

今回はここまで。

出典紹介

礼記 全 49 編

儒教の経典。五経の一つ。前漢の戴徳が収録した「大戴礼」を甥の戴聖が編集しなおして「小戴礼」とし、これが現在の礼記となった。周末期から秦・漢時代にかけての礼に関する諸説を集めたもので、日常の礼儀作法、冠婚葬祭の儀礼から生活のあらゆる面に及ぶ礼の記述があり、当時の制度・習俗を知る貴重な資料。

^{えつぜつ}越絶書 全 15 卷

周代の越の国の攻防を記した歴史

書。漢

の^{えんこう}袁康の著。一説に、子貢（孔子の門人）

の著とも言われる。呉と越の争いを記した「呉越春秋」と内容が重複している部分もあるが、文章は本書の方が優れている。